

本書が、乳幼児に限らず児童・青年期、そして人の心を扱う仕事をする方々に、乳幼児精神医学の pregnant な分野に関心を寄せるきっかけになることを期待する。

(北里大学医学部精神科学/
相模女子大学：井上勝夫)

関係からみた発達障碍

小林隆児 (著)

金剛出版

(ISBN 978-4-7724-1146-2)

A 5 判 234 頁 3,360 円

「関係」などという視点から自閉症を論じようものなら、たちまち「親を責める心因論」だ、「母原病論」だと批判を浴びる時代が長くあった。本書の著者の学会発表がまさにそれに遭遇した場面を目のあたりにしたことがある。しかし、著者はそうしたドグマに屈せず、自閉症における「関係」の世界を追究し続けて今にある。その著作のうち、本書は一般向けの雑誌の論考をまとめたもので、平易な筆致で読みやすい。それに加え、冒頭の雰囲気はまだ学界に強く残っていた頃の著作に見られた少し肩に力が入った文章の硬さがほぐれ、それも本書を読みやすいものとしている。モノグラフを集めた論集のため、さまざまなモチーフから「関係」という主題が変奏され、著者の考えを多角的に理解するうえにも役立つ本である。

著者の出発点は母子ユニット (MIU) で行なった新奇場面法 (SSP) にある。エイシズワースの原法は、その場面での子どもの反応 (動き) をリトマス紙にして、その子どもの持ち前の愛着パターンを色分けするものである。しかし、著者はそこから疑う。子どもの反応タイプはその子どもの属性なのだろうか。そうではなく、SSP 場面での養育者の動き、ストレンジャーの動きとの関数して子どもの反応 (動き) は現れるのではないか。では、その養育者やストレンジャーの動きはどう生れるのか。そこで子どもの動きとの関数として生れる。SSP で観察されるのは、こうしたきわめて双方向的で相互規定的で循環的な現象、まさしく「関係」という現象にほかならない。著者の関心は、子どもを

対象とする、養育者を対象とする、のではなくその「関係」を対象として観察し分析する方向へ向かうのである。

その視点からとらえれば自閉症とされる子どもは、人に関心がなかったり人とのかかわりを求めないわけでないとするがわかる。相手への関心や求めの動きが観察されるし、SSPで一人きりにされた状況では明らかに不安や緊張を高める。にもかかわらず、積極的にかかわりを求める動きに弱く、むしろかかわりを避ける動きすらみせる。相手からすれば、子どもからの接近サインが読みとりにくい上、積極的に関わろうとすれば避けられるなどして、ここから両者の「関係」に大きなずれやボタンの掛け違えが生じ、それがまた「関係」の発展を躓かせる悪循環を生んでいると著者はとらえる。著者は、そこに観察される現象を「アンビヴァレンス」と呼び、キーワードとしている。

キーワードだけにていねいに検討したいのだが、プロイラーやフロイトのアンビヴァレンスは、同じ対象に対して同時に相反した感情や意志や認識が生じるという個体の内的な心理機制を指す概念である。しかし、著者がここで使う「アンビヴァレンス」は、それとはちがう。相手との関係を求めて近づきたい欲求はありながら、いざ近づこうとしたり相手が近づいてくると関係への欲求が満たされる前に不安や緊張のほうが高まって欲求の充足が阻まれるという独特な「関係」のあり方を指す概念と思われる。

なぜそうした現象が生じるかも考えどころで、以前の著作で著者はその原因を子どもの知覚過敏に求めたかと思う。抱擁など一般には心地よさや安心をもたらす刺激が、この子どもたちには過剰で苦痛な刺激と知覚されるせいではないか、と。しかし、本書の論考では、原因論的な追究よりも、子どもとまわりとの間に生起する「関係」の構造を現象学的に追究するほうに力が向けられている。原因追究は、ではなぜ知覚が過敏なのか、コレコレのせいだろう、ではなぜコレコレなのか、アレアレのためだろう、ではなぜアレアレなのか……と無限の連鎖にはま

りこむ。原因→結果の線形な因果律で精神現象を説明する無理に著者は気づいている。心因論か脳障害因論か以前に「〇〇因」といった発想自体を疑うのである。

自閉症の知覚の問題は「原初的知覚様態」、すなわち知覚世界がことば（概念・意味）によって分節化される以前の知覚体験のあり方として取り出されている。未分化で生々しく、ウェルナーのいう「相貌性」や「生氣性」に満ちた世界で、未分化なだけにそこでの体験は不安や混乱に彩られやすく、著者のいう「アンビヴァレンス」を背景づける大きな要素となる。その一方、豊かなオリジナリティをはらんだ「創造」性の源基ともなりうることも著者は指摘している。

考えてみれば、原初的知覚様態自体は自閉症とかぎらず、言語獲得以前、ピアジェ的にいえば感覚運動期の乳児に一般にみられる体験様式であろう。ただ、定型発達にある子どもはまわりとの関係の支えによってそれが過度な不安や混乱を生むことから護られ、かつまわりとの関係を通して足早に言語的体験様式の世界へと抜け出してゆける。それに対して、自閉症の場合は関係の支えを十分もてないため原初的知覚様態はしばしば過度の不安や混乱をもたらし、それがまたまわりとの関係の形成や関係の支えを困難にしていると考えられる。また、関係形成の遅れが言語的体験様式の世界への抜け出しを遅らせ、そのぶんだけ原初的な知覚様態の世界にながく留まり続けるともいえるだろう。ここに見てとれるのも、原因→結果ではなく、どちらが先ともいえない双方向的・相互規定的な循環の構造である。

私たちの精神機能は、こうした双方向性と循環性をもったさまざま関係から生み出され、関係から成り立っている現象である。これは感覚遮断実験などでまわりとの関係をいっさい断ち切られると精神機能がどうなるかを考えれば瞭然だろう。自閉症とかぎらず、「関係」の視点なしに人間の精神現象やその障害を解明することはできない。本書において著者が「関係発達

臨床」はすべての精神障害の理解や支援に役立つはずと述べ、その取り組みの一端を示しているのは、まさにこのところであろう。

ところで、「関係」は、双方向性と循環性に加えて、必ずなんらかの対立性や矛盾性をはらんでいる。なぜなら、関係とはなんらかの差異の間ではじめて生じる事態だからである。発達論的にいえば、関係が対立や矛盾をはらむゆえ、そのダイナミズムから「意識」とか「こころ」とか呼ばれるものが育まれてくると考えることもできる。関係が無矛盾で、関係世界にまったき充足のうちに溶け込めればおそらく自意識も芽生えない。私たちの「こころ」の世界は、関係世界が対立・矛盾をはらむがゆえに生み出されたのだから。

私たちは関係によって支えられつつ、一方、そのはらむ対立・矛盾によって揺るがされる。著者のいう「アンビヴァレンス」とは、そうした対立・矛盾の一つのあり方と考えられる。ただ、わたしたちの心的世界を生み出し、同時のその失調も生み出す関係の対立性・矛盾性は、「アンビヴァレンス」(だけ)に尽きるだろうか。著者の「関係発達臨床」が精神障害全域、いや精神現象全域へと視野をひろげてゆくにつれ、この問いにであうのではなからうか。そこにどんな答えが見いだされてゆくのか、著者の仕事の展開に注目してゆきたい。

(学習院大学文学部心理学科：滝川一廣)

児童福祉施設における暴力問題の理解と対応

—統一・現実に介入しつつ心に関わる—

田嶋誠一(著)

金剛出版

(ISBN 978-4-7724-1217-9)

A5判 752頁 8,925円

かつて呉秀三は「精神病者私宅監置ノ実況」(1918(大正7)年)において、「我邦何十万ノ精神病者ハ実ニ此病ヲ受ケタルノ不幸ノ外ニ此邦ニ生レタルノ不幸ヲ重ヌルモノト云フベシ」と言った。

厚生労働省の調査によれば、平成23年10月1日現在、全国に児童養護施設は585あって、そこに29,744人の子どもが生活しているという。彼らは決して望んでここに来ていない。自らの責に帰さない事情で泣く泣く連れて来られた。その親によって虐待を加えられてきた子どもも多い。児童福祉のあらゆる営みは、こうした子どもたちをその不幸から解放するものでなければならぬが、過酷な状況をくぐって漸く辿り着いた児童福祉施設においてさえ、暴力と恐怖が支配する世界が待っているのだとしたら、これを、「不幸ヲ重ヌルモノ」と言わずして何であらう? そして、児童相談所をはじめとする児童福祉関係機関は、不幸にしてこれら機関の世話にならなければならなくなった子どもたちの生殺与奪を司るという点において、この不幸のダブルパンチに関して有責なのである。

歪イメージ療法で知られる臨床心理の大家が老境に入ってなおこうした現実に涙し、怒り、闘い続けている。著者の問題提起はこの問題のバンドラの匣をこじ開けるものとなる。箱(施設)の中の酸鼻の災厄に人々は目を覆う。児童福祉関係者は己の罪に恐れ、頑なに目を閉じる。著者は本学会第50回総会(2009年10月1日京都)のシンポジウムにおいて、あえて自戒を込めて「かくも長き放置(ネグレクト)」と述べ